

第九回日蓮宗化学研究発表大会

日本が核武装？ 立正安国はスローガンではありえない

梅 森 寛 誠

日本の核武装が懸念されはじめています。これからお話する、内外の、特に日本の原子力をめぐる状況は、一段とさわどさを増しているように思います。その中で、『立正安国』を宗門運動に掲げ、安国論奏進七五〇年を控える私たちは、どうあるべきでしょうか。運動のためのみの、内向きのスローガンに陥ってしまうことを、恐れます。宗祖の立正安国がスローガンでなかったことは言うまでもなく、止むに止まれぬ対社会的宗教活動（しばしば私たちが表現しがちな）、というよりは、それが法華経そのものが求めるものであった基本は、自身の行動の中で、何度も問い返したいと思います。

これら現在の原子力の動向を軸に、私や仲間との行動経過を交え、以下略述したいと思います。もって私たちの『立正安国』を具体化させる動きにつながることを願うものであります。

確かに今は、核武装は政府内では公式には「非核三原則」（持たず・作らず・持ち込ませず）として否定されています。しかしそれは政府の政策であり、政策変更はいつでもあり得ます。そして今、核武装を疑わざるを得ない状況証拠が揃いつつある、と私は見えています。私はことさら危機を煽ろうとは思いませんが、「核武装の止むなきに至りました」と大本営発表がされる時では既に遅いんです。はつきり形に現れる前の段階で、言わなければなりません。

実は、日本の原子力開発は最初から核武装が目的だった、「平和利用」の美名の陰で一貫して進められてきた、のが真相だと考えられます。現在の状況を見れば、それは発電事業やエネルギー開発では到底あり得ない、と私はとらえています。

一、私と「反原発」

資料の中に、本年八月発行の「はんげんぱつ新聞」の記事があります。これは反原発運動の機関紙ですが、一面の人物紹介コーナーにたまたま私が登場することになりました。「総ヒバク」と「核武装」というタイトルは、後で触れる敦賀集会を意識したのですが、今ここでお話ししようとするとも重なるわけです。

そして同時に、私と反原発というべき、二十数年に及ぶ自分史的な関わりをも表現したものです。この問題に関する私の自己紹介を兼ねる内容でもありますので、お読みください。

そこで述べた通り、私は一九七九年の米国スリーマイル島原発事故―住民が避難を余儀なくされる緊迫の事態、に衝撃を受け、宗門も含むこの国の反核平和の運動が反原発と言わないことに、大きな疑問を抱きました。八〇年代初頭、チェルノブイリ原発事故の四、五年前には、本堂に「反核Ⅱ反原発」と大書して、自分なりの立正平和を訴えていました。「原子力の平和利用」という言葉はなお生き続いています。それが欺瞞と幻想であることは、この国の原子力行政の今日的動向を見れば、いよいよはっきりしてきました。真の核の姿があらわになってきました。

二、内外の原子力をめぐる情況

それは、具体的に言えば、資料の「はんげんぱつ新聞」にある青森県・六ヶ所再処理工場の「14回目の竣工延期」の記事にある通り、延期を繰り返しながらも本格稼働に突入しようとしている現実があります。この施設は、国内の

原発（軽水炉）の稼働によって生み出された使用済み核燃料を再処理し、プルトニウム他を取り出す化学工場です。その稼働によってとつもない放射能を環境に放出し、被曝と汚染をもたらすことは、以前述べました。

そして、ここで抽出される、地獄の大王という名のプルトニウムこそが、軍事的に極めて有用な猛毒物質なわけです。それ故、この物質には核兵器開発疑惑が付きまとい、その扱いは国際的監視の下にあります。この国では、海外での再処理委託分を含め、既に四四トンものプルトニウムを保有しています。六ヶ所の工場が本格稼働すれば、その上に年八トンが蓄積されることになります。ただ、ここで取り出されるプルトニウムは純度が低く、そのままでは核兵器用にはなりません。ところが、これを次に述べる高速増殖炉に装荷すれば事情が異なってきました。

若狭の高速増殖炉『もんじゅ』です。これは迹化の菩薩名が冠された、という意味でも看過できないものを含んでいます。それに関しては、少々古い資料ですが、これの以前の事業者である動燃事業団―事故やスキャンダルを繰り返し、今は日本原子力開発機構に統合されている―発行のパンフに、この名称の「命名の由来」を自ら述べているので、留意しました。「原子力の巨大なエネルギーをコントロールする」と、菩薩名があてられ（利用し）「科学と教学の調和の上に」と正当化させます。最初から傲慢さと「神（菩薩）頼み」の同居する技術だったわけですが、長期停止を自ら招いた一九九五年の火災事故は、釈尊成道会の十二月八日だったことから、文殊菩薩がそうした奢りや貪りやおろかさをこそ戒めたものだ、と受け止め、その旨を述べてもきました。

さて、長らく停止状態にあった、その曰く付きの施設が、改造工事を経て、運転再開が（十月から〇九年二月に先送りされ、それも困難に）新聞記事資料Vというが）目前に迫っている現実があります。そして何故に、技術的にも破綻したはずの高速増殖炉開発に固執するか、ということが、この国のウラの（真の）原子力推進の目的であります。原型炉の『もんじゅ』は出力二八万キロワットで、今の標準的な原発の四分の一、しかも発電実績は微々たるものです。実証炉（これはフランスで挫折した）の予定すらありません。この国は、これに兆単位の投資をしています。高

速増殖炉は、低純度プルトニウムを装荷して運転することによって、核分裂性プルトニウムを生成させるからです。事業団パンフによる核燃料サイクル図なるものを資料に掲げました。が、実際にはサイクルはしていません。「資源に乏しい我が国は」の枕詞ではじまるこの国の原子力政策に於いては、資源活用は表向き（しかも実際は機能せず）で、真の意図は別の所にある、というわけです。

それは、この高速増殖炉の使用済み核燃料を再処理する、茨城県東海村のRETF（リサイクル機器試験施設）によって、いよいよよはつきりします。ここで取り出されるのは、九八%以上の高純度プルトニウム、まさに小型軽量の高性能核兵器の材料そのものなのです。この施設は、『もんじゅ』の事故停止等にもより、二〇〇〇年に建設中断されていたが、維持費が投じられていた、という報道記事が、四月に私の住む地方紙でありました。全国紙では見ていません。この施設はほぼ完成されており、『もんじゅ』再開とともに稼動する準備が進められていることが考えられます。

このように、この国の核武装を疑うに足る情況は、政府の公式見解とは別に着々と整えられています。核超大国・米国の関連で、無視できない動きが直近に於いてありましたので、それらを付け加えたいと思います。一つは米印原子力協定が現実となりました。これまで、NPT（核不拡散条約）未加盟のインドへは、民生用原子力の技術協力が禁じられていたが、それが解禁となる事態へ向かいます。これは、不平等ながら一定の歯止め効果が期待された核不拡散の枠組みが、内部崩壊に向かう懸念が強まることを意味します。米国にとってイスラムの核には厳しく当たるが、自らの陣営に属する国の核は優遇する、という二重基準であり、パキスタンとその背後の中国、そしてイランを刺激するのは間違いありません。原子力市場の魅力を優先させた代償は軽視できないでしょう。やはりNPT未加盟で事実上の核保有国イスラエルを想起しますが、日本とて無縁ではありません。日本は結局追認する形になりましたが、米国庇護下で核武装、という戦略的位置付けで考えるべきでしょう。

もう一つは、原子力空母『ジョージ・ワシントン』の横須賀入港の示すものです。安保体制や非核三原則の問題で見る向きもありますが、加えて前述の米国の世界戦略の方向で読み解くことが必要と思われれます。事故や故障が少ない原子力空母が、軍事機密として情報がほぼ閉ざされた中、主権国家の首都圏を睨む形で停泊する構図は、両者間の関係を如実に示すものです。近年の日本の原子力政策（プルトニウム利用路線）もまた米国の掌握下でその一翼を担わせられ、軍事との一体化が進むことが懸念されるところです。

三、「宗教者の会」'08・敦賀全国集会

この国の原子力をめぐる状況を憂い、かつそれを自身の宗教的課題と位置付ける、異なる宗教者と共に、教派宗派を超えて「原子力行政を問い直す宗教者の会」を結成したのは一九九三年。この年には六ヶ所・再処理工場が着工され、若狭の高速増殖炉『もんじゅ』の初臨界が迫る（実際は翌年）、核燃料サイクルの実働に一步を踏み出した時期です。爾来十五年、大小様々な事故・トラブルやスキャンダルを繰り返し、予定を著しくオーバーしつつも、欧米諸国が撤退ないし沈滞する中で、この国は執拗に推進の手を緩めず、危機的情况を深めました。そうした中、私たち「宗教者の会」は、この九月一日～三日、全国集会を行うことになりました。

今回、資料の中に、同集会のよびかけ文、私が文案作成した集会宣言文、及び私が地元運動の機関紙に報告予定の各文面を入れました。「もんじゅ」再処理は、総ヒバクと核武装への道」と掲げた、手応えの感じられる集会となりました。先ほどの「はんげんぱつ新聞」での私の記事で「総ヒバク」と「核武装」のタイトルは、この集会テーマでもあったわけです。そのうち、「核武装」に関しては、基調講演の講師に植田敦氏をお招きし学習いたしました。

本日は「日蓮宗教・化学研究発表大会」（？）でありますので、化学の専門家の声に耳を傾けるのもよろしいかと思えます。『核武装の準備を進める日本』という当日の講演資料を今回そのまま用意しました。実はこの植田さん

は、本宗でもかつて中央教研の講師にお呼びしたことがあるんです。九九年に清澄で行った時です。それらを収録した『現代宗教研究』34号の目次と、この時の講演の最初の部分のみ、今回資料にお入れしました。「環境問題の解決には学問が必要」という講題の、今に通じる問題提起を九年前にしていたわけですね。その段階で「実は日本はすでに核開発に深入りしています」と、講演の最初のところで述べています。この方は痛快なまでに真実を歯に衣着せず論述する人で、それ故内部でも論争が巻き起こることがしばしばあるのですが、私としては、その本質を曲げずに語る姿勢も含め、支持している一人でもあります。

それで、敦賀集会の講演も、月刊誌へ投稿しボツとなった幻の原稿をベースにしたもので、この核武装テーマの内の状況を物語るものでもあります。その論旨は冒頭から衝撃的です。「高速炉常陽（実験炉）が一九七七～八三年に生産したプルトニウム（同位体比率九九・二％）は一九・二kg。もんじゅが一九九四年五月～九五年十二月に製造したプルトニウム（同九九・八％）は約一七kg」と、〇七年の一月と二月に文科省が福島参院議員の質問に回答した内容を紹介します。「日本は濃縮度九九％以上の超兵器級プルトニウムを合計して約三六kg生産していた。超原爆十五発分に相当する」と。日本は高速増殖炉導入の段階から、核保有を目指しその材料を蓄積している事実が、担当省庁の役人の口から明かされたわけです。

〇六年の朝鮮核実験時の政府内の核武装議論騒ぎを思い起こします。安倍内閣発足間もない時で、中川（昭）政調会長（当時）が「核保有の議論はあっていい」と語り、麻生外相（同）が追認し「周辺事態の範疇に入る」と戦争態勢を煽る発言をしました。これに関する当時の新聞記事も用意したのでご覧ください。これらの発言意図には様々な憶測が可能です。この時既に、核武装は抽象的仮定的段階を超えていたことは確実に言えます。たまたま、この敦賀集会初日の日程を終えて迎えたニュースは、首相退任表明でした。出来レースを経て、後任はこの時外相で事態を煽った人物が就任したわけですが、今後の原子力政策の成り行きも案じられるところです。植田氏はこの核実験につ

いて別の角度から述べています。

さらに、この植田氏講演で驚かされたのは、I A E A（国際原子力機関）の実態です。私は、曲がりなりにもこの機関が日本を含む怪しげな国には厳しい査察を行って監視の眼を光らせている、と考えていました。残念ながら、ここでも二重基準のようです。元I A E A広報部長から入手した情報として、査察を大幅に手抜きしている、と言います。三六kgの超兵器級プルトニウムの存在も含めて。また、此度の米印協定では、インドの所有する高速炉に関してI A E Aは査察しないことにする、とか。植田氏は「それのお手本は日本だ」と。道理で反対できるはずもなかったわけです。

さて、前項で述べた米印原子力協定と米原子力空母入港の件は、いずれも、九月はじめの植田氏講演の後まもなく具体的な形となったことで、氏が日本の核武装と米国・アジアとの関連で言及したことでもあります。「アメリカは日本の核武装を認め、アジアの核を属国日本にまかせて引き上げようとしている」「真珠湾攻撃のような裏切りを再び日本にさせないために、アメリカは、第一軍団司令部を日本の首都圏の座間に移転して統合作戦司令部とする。横須賀には原子力空母を配備して首都を威圧する。目的は属国日本の裏切りを監視し、これを防止するためである」講演論稿が〇七年三月であったことを考慮すれば、この間の「現実」が、氏の予測を裏付けるものであることがわかります。R E T Fについても「もんじゅ運転再開に合わせて運転を開始し、超兵器級プルトニウムを抽出することになると思われる」と述べました。はたして、集会に於いて、R E T Fを見学できた者の提供による貴重な写真を通じて、ほぼ本體工事が終わってゴーサインを待つばかりの要塞もどきの姿―まさしく秘密「核兵器工場」―を確かめることができました。

四、当問題に關しての発信

このような敦賀集会で得た情報や知見、また現実の動きをもとに、早速私は自分なりの表現を加え、外部へ発信いたしました。手書きの通信『胡桃』No.二二〇の一面に集会の概要を記しました。また、自前の秋彼岸パンフには、日本の核武装ってホント？―「平和利用」のウソと立正安国―と題して、発信を試みました。

「我等愚癡にして誤って毒薬を服せり。願わくは救療せられて更に壽命を賜えと」（如来壽命品）毒薬を服して悶乱する子どもらの姿が描かれていますが、私は、ヒロシマ・ナガサキを体験したはずのこの国が、原子力の「魅力」に取り付かれ、「平和利用」の言葉を弄し（魔術に幻惑され）「毒薬」に手を出した戦後現代史と重ね合わせます。「毒薬」を断ち切り、立正安国を求めよう。こう訴えました。そして、そのためにはアクションが必要になってきます。

秋彼岸パンフでは、妙子と法子の間答形式で表現を試みました。その一部を挙げれば。法子―「立正世界平和の実現」って、宗門の基本方針でしょ？「今まさしくこれ時」よね。妙子―全くその通り。『立正安国論』に「もし先ず国土を安んじ現当を祈らんと欲せば速やかに情慮をめぐらし急ぎ対治を加えよ」と、主人の最後の応答部分で、具体的行動の提起を促している。カギカッコ付き「お題目」運動ではダメなのよ。という具合です。

五、申し入れ行動（「諫曉」、対話）から

本宗宗徒としての私たちが、民衆の安穩が脅かされる事態に遭遇した時、その変革を願い「急ぎ対治を加え」ることを求めるに当たって、今の時代に於いて具体的行動はどうあるべきでしょうか。宗祖に習い「国家諫曉」を、というのが究極的なあり方だとは考えます。ただ、これはしばしばパフォーマンスに陥りがちでもあります。もつとも、そうだと私も私は、その意義を軽視するものではありません。が、より以上に、「教化」を伴う対話、内容的な積

み重ねが重要なのです。市民運動の場に於いても、様々な申し入れ行動は日常的に行われています。前出の「宗教者の会」でも、そうした行動は続けてきました。敦賀集會宣言文作成の過程に於いて、私は「国や事業者の内部の一部では峻烈な葛藤の中にあることも想像できる今、だからこそ」に「対話と打開の可能性も追求していこう」を加えました。この集會の後も私たちは、敦賀市と福井県と国に対して申し入れ書を提出し対話の場をもちました。その時のそれぞれの申し入れ書も、参考のために資料に用意しました。

私は、集會終了後の敦賀市との交渉に臨みました。「非核三原則は『政府の政策』だから変更はいつでも起こり得る。核武装への政策転換が起こったらどうする？」と迫りました。つまり「国策に無批判に付き従った結果、核の加害者になることもあるぞ」との趣旨を述べたつもりでした。が、担当者は聞きもしない「国のエネルギー政策」を、哀れなほど代弁するばかりでした。ともかくも、行動によってこそ物事は明らかになっていきます。意見や立場の異なる、権力を行使する側の人々と対峙し、その表情を凝視しながら、変化を根気強く求めていきたいと思えます。

ところで、本宗の財産とも言える「諫暁」という言葉を異なる宗教者の中で披露した時、すぐに反応を示したのがプロテスタントでした。「預言者」意識なのかも知れません。そしてしばしば引用します。「彼ら（偽預言者）は：平安がないのに『平安、平安』と言っている」（エレミア書）矢内原忠雄の『余の尊敬する人物』にエレミアと日蓮を挙げていることは示唆的です。実際、宗祖は重要遺文（撰時抄、一昨日御書、三澤抄）の中で、中国の典拠から『未萌を知る』という語を用いています。亡国の情況に接し、法華經の經文「況滅度後」に出会ったわけです（三澤抄）。実に仏教者は事が起こる前に「警告」する責任があるな、と痛感します。宗祖をキリスト者の言う「預言者」になぞらえるつもりはありませんが、亡国の兆しを知り、幾多の困難を顧みず、民衆救済のために身を挺して国策の過ちを宗教をもつて糾す、というあり方は、宗教の違いを超えて共感共闘できる部分だと、実感するところです。さて原子力の問題は、既に『未萌』の段階は終わり、破綻の現実が目に見えるところまできています。やはり亡国の情況です。

「世界破滅」に関連します。「沈黙」する暇はさほど残されていないでしょう。

六、立正平和運動とは

改めて確認すれば、宗門が久しく進めてきたこの運動は、かつての戦争協力への反省を踏まえ、戦後、核廃絶と世界平和（浄仏国土）を目指す宗教運動と総括できます。その上で、今何が起こり、あるいは起ころうとしているか、を見れば、私たちはどうあるべきでしょうか。この国の原子力政策が、戦争への道と重なり、それへのあからさまな歩みを始めている、と見ます。すなわち核武装を疑わせる動きが、九条改憲問題と相俟って「戦争突入」前夜のごとき観を呈しています。少なくとも、『立正安国論』奏進七五〇年を、恥じらいなく迎えたい、と願うのみです。